

シナイの「未完了」用法について

—シテイナイと比較して—

道法 愛・白川 博之

A study of *shinai* as a usage of Imperfect in comparison to *shiteinai*

Mana DOHO, Hiroyuki SHIRAKAWA

1. はじめに

筆者が、ある学習者と SNS 上でやりとりする中で、次のような発話が見られた。

- (1) (未完成の絵と、完成済みの絵の 2 枚を呈示して)
「先生はどちらの絵が好きですか。
?最初の絵はまだ完成しませんが、でも二つの絵の中で一つを選んで、カードを作りたいです。」

筆者は、(1) の発話を目にしたとき、違和感を感じ、その原因は、「完成していません」とシテイナイを使用すべきところで、「完成しません」とシナイが使用されていることにあると考えた。

(1) に限らず、日本語において、「未完了」は基本的にはシテイナイで表される。そのため、シナイを使用すると、(1) のように不自然になるか、あるいは、以下のように、「当分実現しない」という<未来>のことを述べるような解釈になることが多い(以下、これをシナイの<未来>用法とする)。

- (2) A 「明日京都に行ってくる。」
B 「今行っても、まだ桜 {#咲かない / 咲いていない} よ。」
(尾崎 2000 : 45)

- (3) A 「もうご飯食べた？」
B 「いや、 {#食べない / 食べていない} よ。」
(作例)

しかし、一方で、シナイでも「未完了」として解釈可能な場合がある。次の (4) (5) (6) の例文は、上記 (1) (2) (3) と同じ「完成しない」「咲かない」「食べない」を使用した例文であるが、シナイでも「未完了」としての解釈が可能のように思われる。

- (4) (リビングで待つ子供がケーキが中々出来ないこ

とに対して文句をつけ)

「ケーキまだ {完成しない / 完成してない} の？」
(作例)

- (5) もうそろそろ五月だけど、うちの桜まだ {咲かない / 咲いていない} の。

(尾崎 2000 : 45)

- (6) (病気のうさぎがご飯に口をつけてないのを見ながら)

「うさびー、ご飯 {食べない / 食べてない} なあ。」
(作例)

つまり、日本語の「未完了」には、主にシテイナイが使用されるが、ある特定の条件下では、シナイも「未完了」として解釈可能だということである。では、シナイが「未完了」として解釈可能な条件とは何なのであろうか。

そこで、本稿では、どのような条件下で、シナイがシテイナイと同じように「未完了」として解釈可能なかを明らかにすることを目的とする。なお、本稿では、「未完了」として解釈可能シナイを、便宜上、シナイの「未完了」用法と呼び、考察することとする。

2. 先行研究と問題の所在

本研究の対象となるシナイの「未完了」用法は、先行研究では、(2) (3) のような<未来>用法と対比し、シナイの<現在>用法として考察されている。シナイの<現在>用法についての先行研究は、①文脈によって成立するとする立場と、②動詞の語彙的性質によって成立するとする立場の二つに大別される。

2-1. 文脈によって成立するとするもの

文脈によって成立するとする先行研究として、工藤 (1996) と、尾崎 (2000) がある。

まず、工藤 (1996) では、シナイが<現在>を表すコンテキストとして、(i) 眼前描写、(ii) 一人称主

語に限定された<態度表明><感覚表出>の場合、(iii) 肯定的想定の実現(事態成立)への期待が強い場合、(iv)「まだ」と共起する場合、(v)「しばらく、ずっと、4日間」のような持続期間を示す形式と共起する場合の5つが挙げられている。このうち、(iii) 肯定的想定の実現(事態成立)への期待が強い場合と、(iv)「まだ」と共起する場合が、本研究が対象とするシナイの「未完了」用法と対応するものである。以下は、工藤(1996)で挙げられている例文である。(7)(8)は、肯定的想定の実現(事態成立)への期待が強い場合、(9)は、「まだ」と共起する場合の例である。

(7) 「昭子さん、何を探しているの。」
「お父さんの胃腸薬。どこかに大量にある筈なんだけど見付からないのよ。」

(工藤 1996 : 95 波線は引用者による)

(8) 「実は、お電話でも申し上げたとおり、私の方の木南さんが、信州に行ったまま帰ってこないのです。4, 5日という予定でしたが、2週間にもなる現在、まだ帰社しません。連絡も何もないのですよ。」

(工藤 1996 : 95)

(9) 「おばさん、和夫くんは?」
「それがね、2時頃どこかに遊びに行ってしまったのよ。どこへ行ったのか、まだ帰って来ないの。何だか心配でならないんだけど。」
「ふーん、まだ帰っていないの。」

(工藤 1996 : 104)

また、工藤(1996)は、副詞「まだ」と共起する場合というのは、必ずしも<現在>を表せるわけではなく、<現在>を表すためには、コンテキストの支えが重要だと述べている。

一方、尾崎(2000)は、シナイが<現在>を表しやすい発話のタイプとして、「話し手が事態を直接観察・確認したことを述べる」場合を挙げている。例えば、以下の(10)(11)は、同じく「(まだ) 咲かない」を使用した例であるが、成立可能性には違いがみられる。尾崎(2000)によれば、(10)は、うちの桜を話題にしており、話し手が事態を直接観察しているため、シナイが使用可能であるが、(11)は、京都の桜を話題にしており、話し手が事態を直接観察していないために使用できないのだとされる。

(10) もうそろそろ五月だけど、うちの桜まだ {咲かない / 咲いていない} の。

((5) 再掲)

(11) A 「明日京都に行ってくる。」

B 「今行っても、まだ桜 {#咲かない / 咲いていない} よ。」

((2) 再掲)

また、尾崎(2000)は、発話時による観察は無理になくても良く、発話時の観察・確認より、むしろ、発話時より前に観察・確認していることが重要になると述べている。

2-2. 動詞の語彙的性質によって成立するとするもの

日高(1995)は、「マダ~シナイ」が「マダ~シテイナイ」と交替しやすい動詞があるとし、その例として、「(時間に) なる」「戻る」「いく」「届く」等の動詞をあげている。

(12) まだふた月にしか {ならない / ナッテイナイ} のに、もう何年もここで暮らしているような気がする。

(日高 1995 : 154)

(13) 「憲一は帰りませんか?」

「まだ {戻りません / 戻ッテオリマセン} の。」

(同上)

(14) 女性の進出は、実は南極にもあてはまる。オーストラリアはぜんぶで4つの南極基地をもっている。そのうち2つは、女性が隊長をつとめているそうだ。日本はまだそこまで {いかない / イッテイナイ} が、一昨年の第29次南極観測隊に初の女性隊員が加わった。

(日高 1995 : 155)

日高(1995)によれば、これらの動詞は、語自体が「発展→実現」という「事態の発展段階」を含意するため、シナイでもシテイナイでも交替可能になるとされる。

また、逆に、「事態の発展段階」の含意がない場合には、シナイはシテイナイとは交替しにくく、とくに、意志動詞の一人称主語の平叙文、二人称主語の質問文の場合に交替しにくいと述べられている。

まず、シナイが成立する文脈についてだが、先行研究で挙げられた文脈は、シナイの「未完了」用法が成立しやすい文脈である可能性はあっても、シナイの「未完了」用法の成立に必須とは言えないように思われる。

工藤 (1996) は、「『まだ』と共起する場合」, 「肯定的想定の実現 (事態成立) への期待が強い場合」の 2 つを挙げている。まず、「まだ」と共起する場合というのは、工藤も述べているが、必ずしも成立可能でなく、冒頭で挙げた (6) のように「まだ」が共起しなくとも成立する場合もあることから、成立に必須とは言えない。また、「肯定的想定の実現 (事態成立) への期待が強い場合」というのは、確かにシナイが「未完了」として解釈されやすいように思われるが、一方で、期待が感じられなくとも成立する場合もあるように思われる。

- (15) (久しぶりに再会した友人に)
「変わらない / 変わっていない」ね。」
(作例)

上記 (15) の「変わらないね」は、「友人は変わっているはずだ」というような期待を抱いて発された発話とは考えにくい。このように、事態成立への期待が感じられない場合にも、シナイの「未完了」用法は成立可能であることから、工藤 (1996) の「事態成立への期待が強い場合」というのは、シナイの「未完了」用法の成立に必須とは言えない。加えて、(2) (3) のように未来<の解釈を受けるシナイについても、「いずれは実現するだろうが、(当分は実現しない)」というように、「肯定的想定」があるように思われることから、工藤 (1996) の説明では、シナイの<未来>用法との違いも分かりにくいように思われる。

尾崎 (2000) では、「話し手が事態を直接観察・確認して述べる」場合という文脈を挙げられていたが、これも工藤 (1996) 同様、成立しやすい文脈ではあっても、シナイの「未完了」用法の成立に必須とは言えないように思われる。たとえば、(16) を見られたい。

- (16) A 「田中君、起きた？」
B 「まだみたい。」
A 「もう 10 時なのにまだ 起きない / 起きていない」の？」
(作例)

(16) は、「田中くんがまだ起きていない」という事実を、B から「間接的に」聞いた場面である。このような場合であっても、シナイの使用は可能であることから、尾崎 (2000) の「話し手が事態を直接観察・確認して述べる」場合というのも、シナイの「未完了」用法成立に必須とは言えないように思われる。

また、日高 (1995) では、動詞の語彙的性質が、成立要因となると述べているが、日高 (1995) で挙げられた例文を概観すると、動詞の語彙的性質ではなく、文脈によって成立していると思われるような例がある。例えば以下の (17) である。

- (17) 「憲一は帰りませんか？」
「まだ戻りません / 戻ッテオリマセン」の。」
(13) 再掲

(17) の「まだ戻りませんの」が自然に成立するのは、「いつもなら戻っているはずなんです (今日はまだ戻りませんの)」というような、工藤 (1996) が述べる「事態成立への期待が強い場合」ではないだろうか。このことから、動詞の語彙的性質がシナイの「未完了」用法の成立要因となりうるのかについても、再検討の余地がある。工藤 (1996) や、尾崎 (2000) で述べられているように、文脈が、成立に影響を与えることが考えられるため、文脈の影響がないことを示した上で、それらの動詞を使用したシナイの例文が成立可能なのかを検証する必要があるだろう。

以上のことから、本稿では、先行研究の結果を踏まえつつ、シナイの「未完了」用法の成立条件は何かを明らかにする。

3. シナイの「未完了」用法の成立条件

前節で、動詞の語彙的性質によって成立するように見える場合も、文脈によって成立している可能性があることを述べた。そこで本稿では、まず、「シナイ」の未完了が成立する文脈について考察し、シナイの「未完了」用法の成立に必須となる文脈を判別する。そして、その文脈を排除した状態でも、日高 (1995) であげられた動詞が成立するのかが検証し、その上で、シナイの「未完了」用法の成立条件は何かを明らかにしていく。

冒頭でも述べたが、「(マダ) シナイ」は、「未完了」ではなく、<未来>のことを述べる解釈になることが多い。以下は、同じく「まだ咲かない」を使用した例文であるが、(18) は「未完了」として解釈可能なのに対し、(19) は「未完了」ではなく、「当分実現しない」という<未来>のことを述べるような解釈になる。では、同じく「(マダ) シナイ」でありながらも、「未完了」と<未来>という異なる解釈になる、両者の共通点・相違点とは一体何なのであろうか。

(18) もうそろそろ五月だけど、うちの桜まだ {咲かない / 咲いていない} の。

((5) 再掲)

(19) 京都の桜、まだ {#咲かない / 咲いていない} だろうなあ。

(作例)

まず、両者に共通するのは、「当該事態が実現する」という、話し手に「肯定的想定」があることである。「未完了」用法の(18)であれば、「五月だったら咲いているはずだ」という肯定的想定が、<未来>用法の(19)であれば、「いずれは咲く」という肯定的想定がある。

しかしながら、両者は、「事態が実現済みであることを話し手が問題にしているかどうか」という点で異なるように思われる。

「未完了」として解釈可能な(18)は、「五月だったらもう咲いているはずだ」というように、五月には事態が実現済みであるという期待があるのに対し、<未来>の解釈になる(19)は、「『いずれ』咲くだろう」というように、事態が実現済みかどうかは問題にしない。

このことを踏まえると、工藤(1996)は、「事態成立への期待が強い場合」に成立可能になるとしていたが、正確には、「事態が実現(成立)済みであることへの話し手の期待」が重要であると思われる。「事態が実現済みであることへの話し手の期待」が重要であることは、以下(20)(21)を見ても確認できる。シナイの「未完了」用法というのは、(20)のように、ただ実現していないことを事実として述べるだけでは成立せず、(21)のように、「例年には満開になっているから、今年ももう咲いていていいはずだ」という、話し手に、事態が実現済みであることへの期待があることが重要になるのである。

(20) 「お宅の桜、もう咲いた？」

「いや、まだ {#咲かない / 咲いていない} わよ。」

(21) 「お宅の桜、もう咲いた？」

「それが、まだ {咲かない / 咲いていない} のよ。
例年は満開になってる頃なのに。」

((20) (21) ともに作例)

また、工藤(1996)では特に言及されていないが、この「期待」というのは、話し手自身のものであることも非常に重要である。たとえば、以下(22)のように、周りが「実現済みだろう」という期待を持っていても、

話し手自身にそのような期待がない場合は、シナイの「未完了」用法は成立しにくい。

(22) 「もう五月だし、お宅の桜、もう咲いたでしょ？」

「いや、まだ {#咲かない / 咲いていない} わよ。」

(23) 「もう五月だし、お宅の桜、もう咲いたでしょ？」

「それが、まだ {咲かない / 咲いていない} のよ。

例年は満開になってる頃なのに。」

((22) (23) ともに作例)

しかし、工藤(1996)の反例としても挙げたが、以下の(24)のように、話し手の期待が感じられずとも、「未完了」として解釈可能な場合がある。

(24) (久しぶりに再会した友人に)

「{変わらない / 変わっていない} ね。」

((15) 再掲)

結論から言うと、(24)が成立可能なのは、「話し手が、事態が未実現であることを目の前で捉えていること」が起因していると考えられる。その根拠として、以下の例文(25)～(28)を挙げる。

(25) (妻に頼まれ、病気のうさぎの様子を見ている夫。その夫に対し妻が)

妻「うさピーごはん食べた？」

夫「(見ながら)いや、まだ食べないよ。」

(26) (妻に頼まれ、オーブンの中のクッキーの焼き加減を見張っている夫。その夫に対し妻が)

妻「クッキー焼けた？」

夫「(のぞきながら)いや、まだ焼けないよ。」

(27) (うさぎがご飯を食べたか確認してきた夫に対し、妻が)

妻「うさピーごはん食べた？」

夫「?いや、まだ食べないよ。」

(28) (クッキーが焼けたかどうか確認してきた夫に対し、妻が)

妻「クッキー焼けた？」

夫「?いや、まだ焼けないよ。」

((25)～(28) すべて作例)

(25)(26)は、波線部「病気のうさぎを見ている夫」「オーブンの中のクッキーの焼き加減を見張っている夫」からも分かるように、話し手が、事態が未実現であることを目の前で確認している場面であるのに対し、

(27) (28) は、「確認してきた夫」，つまり，話し手が確認したのは<発話時>より前であり，目の前では確認していないという違いがある。話し手が，事態が未実現であることを目の前で確認している(25)(26)はシナイの使用が可能なのに対し，目の前で確認していない(27)(28)では，シナイの許容度が下がる。もちろん，(27')(28')のように，話し手に期待があるように言えば，成立可能だが，そうでない限りは，シナイは使用しにくい。

- (27') (うさぎがご飯を食べたか確認してきた夫に
対し，妻が)
妻「どう？うさぎピーごはん食べた？」
夫「(残念そうに)いや，まだ食べないよ...」
- (28') (クッキーが焼けたかどうか確認してきた夫
に対し，妻が)
妻「どう？クッキー焼けた？」
夫「(残念そうに)いや，まだ焼けないよ...」
- ((27') (28') とともに作例)

では，なぜ，話し手が，事態が未実現であることを目の前で確認しているかどうか，シナイの成立・不成立に関わるのであろうか。また，同じくシナイの「未完了」用法が成立しやすい「事態が実現済みであることへの話し手の期待」という文脈と，どう関連性を持つのであろうか。

工藤(1996)によれば，否定発話で使用される場合には，前提として，必ず話し手の肯定的想定が存在するとされる。そのことを踏まえると，シナイの場合は，前提として，スル(=実現する)という肯定的想定があることになる。目の前で未実現の事態を捉えている場合に「(マダ)～シナイ」という否定発話が発せられた場合は，話し手の中で，「目の前の事態は見たときには実現する」すなわち，「<発話時>には実現している」という想定があったことを示しやすく，シナイが「未完了」として解釈されやすいのではないだろうか。

逆に，話し手が目の前で未実現の事態を捉えていないような場合には，「実現する」という想定があることを示すことはできても，その実現が<発話時>には実現しているという想定があるかどうかを示すことは出来ない。そのため，話し手が目の前で未実現の事態を捉えていないような場合は，(29)のように，「話し手の実現済みへの期待」という文脈によって，事態が実現済みかどうかを話し手が問題にしていることを明確に示す必要があり，不明確な場合は，「『いずれ』は実

現するが，当分実現しない」という<未来>用法の解釈になりやすいのであろう。

- (29) 「お宅の桜，もう咲いた？」
「それが，まだ{咲かない / 咲いていない}のよ。
例年は満開になってる頃なのに。」
- ((21) 再掲)
- Cf. 「お宅の桜，もう咲いた？」
「いや，まだ{#咲かない / 咲いていない}わよ。」
- ((20) 再掲)

尾崎(2000)では，発話時による観察は，無理になくとも良く，発話時の観察・確認より，発話時より前に観察・確認しているかどうか重要だとされていたが，これらのことを踏まえると，シナイの「未完了」用法においては，発話時より前に観察・確認したかどうかより，むしろ，発話時に観察・確認していることの方が重要だといえるだろう。尾崎(2000)が，発話時の観察・確認より，発話時より前に観察・確認しているかどうか重要だとしたのは，おそらく，冒頭にもあげた次のような例が成立可能だったからだと考えられる。

- (30) もうそろそろ五月だけど，うちの桜まだ {咲かない / 咲いていない} の。
- ((5) 再掲)

確かに，(30)の例は，話し手が発話時より前に桜を確認している例である。しかし，(30)においてシナイが「未完了」として解釈可能なのは，「もうそろそろ五月だけど」という「話し手の事態が実現済みであることへの期待」という文脈があるからではないだろうか。その証拠に，次の(31)を挙げる。(31)は，(30)同様，発話時より前に観察・確認した場合であるが，「話し手の事態が実現済みであることへの期待」という文脈がなく，そのためにシナイの「未完了」用法は成立しにくい。このことから，シナイの「未完了」用法の成立には，ただ直接観察したかどうかではなく，「話し手が目の前で未実現の事態をとらえていること」が重要であることを主張したい。

- (31) 「お宅の桜，もう咲いた？」
「いや，まだ{#咲かない / 咲いていない}わよ。」
- ((20) 再掲)

以上のことを踏まえると，シナイの「未完了」用法の

成立には、「事態が実現済みかどうかを話し手が問題にしている」ということが、シナイの「未完了」用法の成立に重要であるといえるだろう。特に、「話し手が、事態が未実現であることを目の前で確認している場合には、話し手が<発話時>に事態が実現済みかどうかを問題にしていることを示しやすく、シナイの「未完了」が成立しやすくなる（例文 (25) ~ (28)）。逆に、話し手が、目の前で未実現の事態を捉えていないような場合には、話し手が、事態が実現済みかどうかを問題にしているかが明確でないため、成立しにくいだが、「話し手の実現済への期待」という文脈によって、明確にすることで、成立が可能になると言える（例文 (27)）¹⁾。

では、これらの文脈を排除した場合に、日高 (1995) であげられた動詞を使用した例文は成立するのであるうか。

本稿では、文脈の影響の関わりを排除するため、例文に「-と思う」を付加し、検証する。「-と思う」というのは、まず、話し手の想定を述べる場面であるから、「話し手が、事態が未実現であることを目の前で確認している場合」にはならない。加えて、「-しないと
思う」という話し手が否定的想定を持つ場面であるから、「話し手の実現済への期待」という文脈にもあてはまらない。そのため、「-と思う」を付加した場合には、「話し手が、事態が実現済みかどうかを問題にする」という文脈が成立せず、シナイは「未完了」として解釈できないことが予想される。

実際、以下のように「未完了」として解釈しにくくなってしまふ。

(32) うさピーまだご飯 {#食べない / 食べていない}
と思う。

(作例)

では、日高 (1995) があげた「(時間に) なる」「戻る」「いく」「届く」等の動詞はどうであろうか。

(33) 彼はまだ {#戻らない / 戻っていない} と思う。

(34) 荷物はまだ {#届かない / 届いてない} と思う。

(35) 参加者は、まだ 50 人に {#いかない / いってない} と思う。

(36) まだ 3 ヶ月に {#ならない / なっていない} と思う。

((33) ~ (36) すべて作例)

上記 (33) ~ (36) の通り、日高 (1995) であげられ

た動詞であっても、「事態が実現済みかどうかを話し手が問題にする」という文脈を排除した場合には、シナイは「未完了」として解釈しにくいことが明らかになった。すなわち、シナイの「未完了」用法の成立には、動詞の語彙的性質ではなく、文脈が重要な役割を果たすと言えるだろう。

以上のことを踏まえると、シナイの「未完了」用法の成立条件は、「事態が実現済みかどうかを話し手が問題にしている」ということだと言える。この条件に則るならば、冒頭であげた (1) において、シナイの使用が不自然になってしまうのは、「話し手が目の前で未実現の事態をとらえている」場面でもなければ、「話し手の実現済への期待」という文脈もなく、「事態が実現済みかどうかを話し手が問題にしている」とは言い難いからだと言明がつく。さらに、日高 (1995) が述べていた、意志動詞で一人称主語の場合に、シナイが成立しにくいということについても、話し手自身がコントロールできることに対して、話し手が実現済みかどうかを問題にするということが不適切であるからだ、と説明が可能なのではないだろうか。

また、シテイナイと比較して述べると、シナイの「未完了」用法というのは、ただ事態が未実現であることを述べるのではなく、話し手が事態をどう捉えているのか、すなわち、話し手が、当該事態が実現済みかどうかを問題にしていることが強く現れた「未完了」だと言えるだろう。

4. シナイの「未完了」用法と動詞の語彙的性質の関わり

前節では、シナイの「未完了」用法の成立には、文脈の関わりが重要であることを述べた。

しかしながら、動詞の語彙的性質はシナイの「未完了」用法において全くの無関係というわけではない。シナイの「未完了」用法において、動詞の語彙的性質が「捉えられる局面」に重要な役割を果たすことは確かである。

以下、(37) (38) (39) (40) の例文を見られたい。

(37) a (息子が祖母へ手紙を全く書いていないのを受けて)

「おばあちゃんへの手紙、まだ {#書かない / 書いてない} の？」

b (息子が祖母への手紙を書き終えていないのを受けて)

「おばあちゃんへの手紙、まだ {?書かない / 書いてない} の？」

- (38) a (友人が黒板の落書きを全く消していないことを受けて)
「あの子ったら、黒板の落書き、まだ {消さない / 消してない} 。」
b (友人が黒板の落書きを全部消していないことを受けて)
「あの子ったら、黒板の落書き、まだ {?消さない / 消してない} 。」

- (39) a (熱が全然下がっていないことを受けて)
「熱が {下がらない / 下がってない} 。」
b (熱があまり下がっていないことを受けて)
「熱が {下がらない / 下がってない} 。」
(40) a (黒板の落書きが全く消えていないことを受けて)
「黒板の落書き、まだ {消えない / 消えてない} 。」
b (黒板の落書きが全部消えてないことを受けて)
「黒板の落書き、まだ {消えない / 消えてない} 。」

((37) ~ (40) すべて作例)

(37) (38) (39) (40) は、それぞれ「書く」「消す」「下がる」「消える」を使用した例文である。動作を表す動詞「書く」「消す」を使用した場合には、事態の開始前 ((37a) , (38a)) は捉えられるが、事態の終了前 ((37b) , (38b)) は捉えることができない。一方、変化を表す動詞「下がる」「消す」の場合には、事態の開始前 ((39a) , (40a)) と事態の終了前 ((39b) , (40b)) の両方を捉えることが可能である。

このように、動詞の語彙的性質というのは、捉えられる局面に影響するのである。具体的には、「書く」「消す」のような動作を表す動詞の場合には、事態の開始前しか捉えられないのに対し、「下がる」「消える」のような変化を表す動詞の場合には、事態開始前・事態の終了前両方捉えることが可能である²⁾。

以上のことから、動詞の語彙的性質は、シナイの「未完了」用法の成立に必須とはいえないが、事態の開始以降を捉えられるかどうかという、シナイの「未完了」用法で捉えられる局面に影響しうるものだと言える。

5. まとめ

本稿では、先行研究の結果をふまえながら、シナイの「未完了」用法の成立条件は何かということについて考察した。その結果、シナイの「未完了」用法が成立するためには、「事態が実現済みかどうかを話し手が問題にする」という文脈が重要であることが明らかになった。

また、日高 (1995) では、動詞の語彙的性質によってシナイの「未完了」用法が成立すると述べられていたが、実際には、成立条件ではなく、捉えられる局面に影響するものであった。

6. 今後の課題

以上、シナイと比較しながら、シナイの「未完了」について考察してきたが、両形式が使用できる場合であっても、どちらの形式が好まれるかは、場面によって異なるように思う。

- (41) 「どう？落書き消えてる？」
「いや、 {?消えない / 消えていない} 。」
(42) (黒板の落書きを消しながら)
「おかしい。 {消えない / ?消えていない} 。」

そのため、今後は、両形式が、それぞれどのように使い分けられるのかを考察していきたい。

注

1) ここでは、「話し手が、事態が未実現であることを目の前で確認している場合」と「話し手が、事態が実現済みであることを問題している」場合をそれぞれ分けて述べているが、もちろん、上記の両方の文脈が満たされ、シナイの「未完了」用法が成立する場合もある。例えば以下の例である。

(病気のうさぎがご飯に口をつけてないのを見て)
「もう2時間も経つのにまだ {食べない / 食べていない} 。」

2) ただし、動作動詞であっても、次の2つの場合は、事態の終了前を捉えることが可能である。

まず第一に、「全部 (食べない)」「3キロ (走らない)」等のように、副詞句によって全体量が規定される場合、つまりは、外的に終了限界が設けられる場合である。

(うさぎがご飯にあまり口をつけていないのを受けて)

「もう二時間経つのに、まだ全部 {食べない / 食べてない}。」

Cf. (うさぎがご飯にあまり口をつけていないのを受けて)

「もう二時間経つのに、まだ {?食べない / 食べてない}。」

第二に、開始限界と終了限界が同時に来るような場合である。(37)の「手紙を書く」(38)の「黒板の落書きを消す」という動作は、比較的時間のかかる動作であるが、以下の「ロウソクの火を消す」のように、瞬間的な動作の場合には、開始限界＝終了限界となるため、事態の終了前を捉えることが可能である。

(誕生日ケーキのロウソクを消さない友人に対し)

「まだ {消さない / 消してない} の?」

参考文献

- 尾崎奈津 (2000) 「シナイの<現在>用法をめぐって—シテイナイとの比較から—」, 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』10(1), pp.41-55, 岡山大学大学院文化科学研究科.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」, 言語学研究会編 『ことばの科学』7, pp.81-136, むぎ書房.
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』, ひつじ書房.
- 日高水穂 (1995) 「『マダ～シナイ』と『マダ～シテイナイ』—未実現相の否定表現—」, 宮島達夫・仁田義雄 編『日本語類義表現の文法(上)』 pp.151-158.
- 森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方について」, 『日本語学』3(12), pp.70-84.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院.
- Vendler, Z.(1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.